

從地涌出の塔

——ガンダーラに於ける東西文化の融合——

高橋堯昭

私はガンダーラの仏塔を尋ね歩いてゐる。そして、そこで知ったことは、ガンダーラからスワット、そしてアフガニスタンに、法華經の「高さ五百由旬、縦広二百五十由旬」⁽¹⁾の背の高い塔が分布していることである。(後述分布圖参照)

更に又、法華經の後半に説かれているチャイトヤ堂の如きものが、やはりガンダーラから西に多数残っている。チャイトヤはストゥーパ(後に仏像)を中に収めた祠堂である。こうしたものがインドの西にかたよって分布しているのは一体どうしたわけかと常々思いながら歩いてゐる。この小論はその疑問についての考究、否それへの試論とも言えよう。



仏の寿命の久遠長久と法の常住を示すため、宝塔が大地から涌現する荘大なドラマが法華經の中に展開する。然して、塔が「大地から涌現」する同じような表現は、他にもあることがわかった。即ち、四分律、五分律、摩訶僧祇律、根本説一切有部毘奈耶、そして又鼻那耶にも部分的に示されているからである。勿論これらの文章は多少異つてはいるが、大よその筋は似ていて、こうした話が共通に流布されていたことを物語っている。

從地涌出(高橋)

その話の筋道を略述すると、

A、摩訶僧祇律卷三十二に「釈尊が拘薩羅國に遊行していると、バラモンが畑を耕していた。世尊を見て農具を地に突き立てて礼拝した。世尊はこれを見て、にっこりほほえまれた。比丘達は何の因縁でほほえまれたのかと不審に思った。これに答えて世尊は比丘に告げられた。「彼は二世尊を拝したからだ」と。更に「二世尊とは」という疑問に答え、「バラモンのつき立てた杖の下には迦葉仏の塔がある。このバラモンから土塊をもらって供えよ」といわれた。皆が世尊の言われた通りにすると、世尊は「高さ一由旬、面広半由延」の迦葉仏の七宝の塔をその大地から現出させたとある。即ち、

仏住拘薩羅國遊行。時有婆羅門耕地。見世尊行過。持牛杖住地礼仏。世尊見已便發微笑。諸比丘白仏。何因緣笑。

唯願欲聞。仏告諸比丘。是婆羅門今礼二世尊。諸比丘白仏言。何等二仏。仏告比丘礼我当共杖下有迦葉仏塔。諸比

丘白仏。願見迦葉仏塔。仏告比丘。汝從此婆羅門。索土塊并是地。諸比丘即便索之。時婆羅門便与之。得已爾時世

尊即現出迦葉仏七宝塔。高一由旬。面広半由延。婆羅門見已即便白仏言。世尊。我姓迦葉。是我迦葉塔。爾時世尊

即於彼処作迦葉仏塔。諸比丘白仏言。世尊。我得授泥不。仏言得授。即時説偈言

真金百千擔 持用行布施 不如一団泥 敬心治仏塔

爾時世尊自起迦葉仏塔。下基四方周匠欄楯円起二重方牙四出。上施槃蓋長表輪相。仏言。作塔法応如是。塔成已世

尊敬過去仏故。便自作礼。諸比丘白仏言。世尊我等得作礼不。仏言得即説偈言

人等百千金 持用行布施 不如一善心 恭敬礼仏塔

爾時世人間世尊作塔。持香華來奉世尊。世尊恭敬過去仏故。即受華香持供養塔。諸比丘白仏言。我等得供養不。

仏言得。即説偈言

百千車真金 持用行布施 不如一善心 華香供養塔

爾時大衆雲集。仏告舍利弗。汝為諸人説法。仏即説偈言

百千閻浮提 滿中真金施 不如一法施 隨順令修行

爾時坐中有得道者。仏即説偈言

百千世界中 滿中真金施 不如一法施 隨順見真諦

(傍線 筆者)

又、なぜ泥のかたまりかと言えば、經文の傍線の如く、百千の黄金より、一にぎりの泥を供える方がよほど功德があり、又一善心、即ちまごころで仏塔を拝み、華や香を供養し、法を諦観する方がいいという。

この一にぎりの泥の供養に關しては、
B、四分律第五十二に

設以三百千瓔珞 皆是閻浮檀金 不_レ如_下以_一一搏泥_一 為_レ仏起_レ塔勝_上

設以_二金百千搏_一 皆是閻浮檀金 不_レ如_下以_一一搏泥_一 為_レ仏起_レ塔勝_上

設以_三金百千擔_一 皆是閻浮檀金 不_レ如_下以_一一搏泥_一 為_レ仏起_レ塔勝_上

設以_三金百千抱_一 皆是閻浮檀金 不_レ如_下以_一一搏泥_一 為_レ仏起_レ塔勝_上

設以_三金百千壁_一 皆是閻浮檀金 不_レ如_下以_一一搏泥_一 為_レ仏起_レ塔勝_上

設以_三金百千嚴_一 皆是閻浮檀金 不_レ如_下以_一一搏泥_一 為_レ仏起_レ塔勝_上

從地涌出(高橋)

從地涌出(高橋)

設以三金百千山一 皆是閻浮檀金 不_レ如以三搏泥一 為_レ仏起_レ塔勝_上

(傍線 筆者)

C、弥沙塞和醴五分律卷二十六⁽⁴⁾

彼迦葉仏般泥洹後。其王為仏起金銀塔。縱広半由旬高一由旬累金銀擊一一相間。今猶在地中。仏即出塔示諸四衆。迦葉仏全身舍利儼然如本仏因此事取一搏泥。而説偈言

雖得閻浮檀 百千金寶利 不如一団泥 為仏起塔廟

(傍線 筆者)

D、説一切有毘奈耶藥事卷十二⁽⁵⁾

假令百千瞻部金 積聚奉持施一切 不如有人一淨心 翹動右邊於仏塔

是時復有一郎波索迦。持泥置於舍利隱處。世尊為彼。亦説伽他曰

假令百千瞻部金 恒以奉持施一切 不如有人一淨心 持泥置飾於仏塔

是時有百千人衆。聞此施泥福利。咸持泥置。或有將諸微妙花香。而散其中。仏亦為説頌曰

假令百千瞻部金 恒以奉持施一切 不如有人一淨心 香花供養於仏塔

時有諸人。持諸花鬘灯明。幢幡傘蓋。供養是處。以清淨心。而來奉施。仏知心已。各為説頌。世尊又説伽他曰

我今所説施福田 如来功德無辺量 正覺覺猶如大海劫 無上尊首最為勝

(傍線 筆者)

とあつて、ほぼ同じ考え方がよみとれる。即ち、仏塔が大地から涌現する時には、人々は百千の黄金より、まごころをもつて供養することが第一条件で、その方がずっと功德がある。ましてや花や煎香をもつて供養すれば……と。

恰も法華經の受持説誦解説書写の「信」を供養するという立場に通ずる。

従つて、このような思想が諸品に共通して存在することは、当時の仏教信仰が、莊大な仏塔を供養する有産階級から、仏塔を奉獻したくても出来ない庶民に普及浸透していった姿、即ち仏教が庶民化内面化の様相を呈して来たことを如実に示していると私は考える。シルクロードの通商で巨利を博した国王や商人達が、現在ガンダーラの山々に残っているような巨大な僧院や塔を寄附していた。彼等にとっては、それが社会的ステータスを誇示することであり、その富の消費の道であつた。且つ又、それによってクシャンの社会が活性化した要因でもあつた。然し一般の庶民にとっては、たとえ小さな奉獻塔一つの建立もままならぬ状況であつた。故に、「童子の戯れに砂を聚めて仏塔を造る……」⁽⁶⁾という法華經方便品の表現の如く「物から心」「信施」を最大とする社会的要請も生じたのであろう。

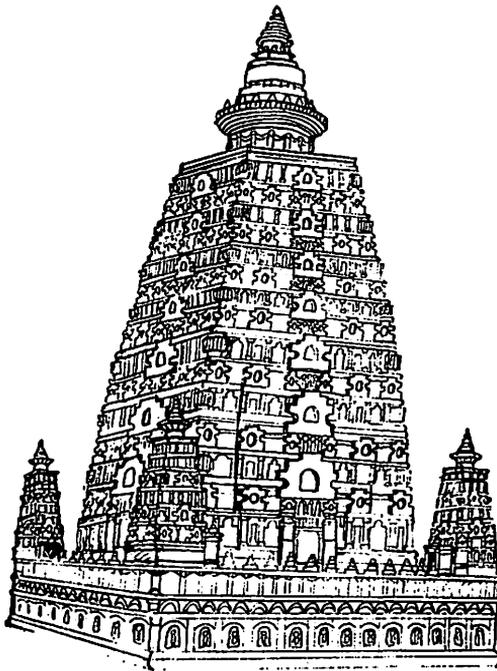
然らば、この時代はいつ頃であらうか。摩訶僧祇律卷三十二の前掲經文に続いて、

爾時婆羅門得不壞信。即於塔前飯仏及僧。時波斯匿王聞世尊造迦葉仏塔。即勅載七百車博來詣仏所。頭面礼足白仏言。世尊。我欲広作此塔為得不。仏言得。仏告大王。過去世時。迦葉仏般泥洹時。有王名吉利。欲作七宝塔。時有臣白王言。未來世当有非法人出。当破此塔得重罪。唯願王当以博作金銀覆上。若取金銀者塔故在得全。王即如臣言以博作。金薄覆上。高一由延。面広半由延。銅作欄楯。經七年七月七日乃成。作成已香華供養及比丘僧。波斯匿王白仏言。彼王福德多有珍宝。我今当作不及彼王。即便作經七月七日乃成。成已供養仏比丘僧。作塔法者。下基四方周匝欄楯。円起二重方牙四出。上施槃蓋長表輪相。若言世尊已除貪欲瞋恚愚癡用是塔為。得越比尼罪。業報重故。是名塔法。塔事者。起僧伽藍時。先預度好地作塔処。一塔不得在南不得在西。応在東応在北。不得僧地侵仏地。仏地不得侵僧地。若塔近死尸林。若狗食殘持來汚地。応作垣牆。応在西若南作僧坊。不得使僧地水流入仏地。仏地水得

流入僧地。塔応在高頭処作。不得在塔院中洗染曬衣著革屣覆頭覆肩涕唾地。若作是言。世尊貪欲瞋恚愚癡已除用是塔為。得越比尼罪。業報重。是名塔事。塔龕者。爾時波斯匿王往詣仏所。頭面礼足白仏言。世尊我等為迦葉仏作塔。得作龕不。仏言得。過去世時。迦葉仏般泥洹後。吉利王為仏起塔。四面作龕。上作師子象種種彩画。」

（傍線及び「」筆者）

である。



方牙四出（ガヤ大塔）

この中で枠でかこつた中に、「円起二重方牙四出」とあるのは、ガンダーラの中心ベシヤワル（カニシカの春・秋の都）郊外シャジキデリーのカニシカ大塔（一辺八七米）（D. B. Spooner, Excavation at shah-ji-ki-Dheri, Archaeological Survey of India, Annual Report, 1909—10）に似ている。これを模したといわれている現存のブダガヤの大塔が四隅に小塔を持つが如くである。このように四隅に小塔をもつのは三・四世紀の舍利容器にも多くあり、現在でも出土している。

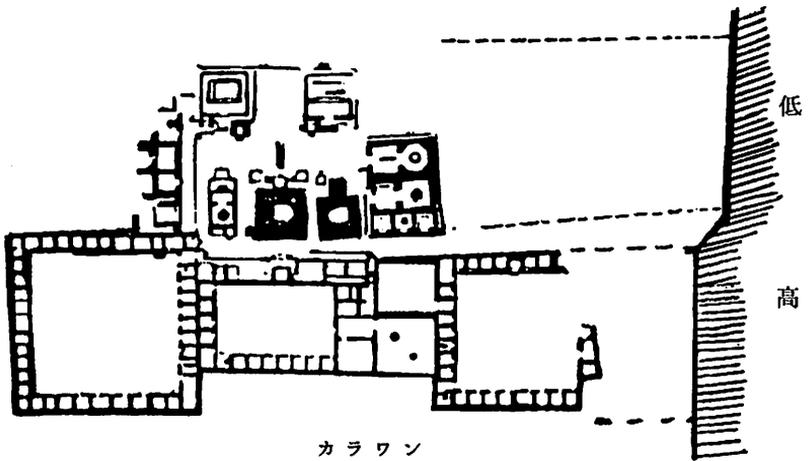
カニシカ大塔は玄奘の大唐西域記にカニシ

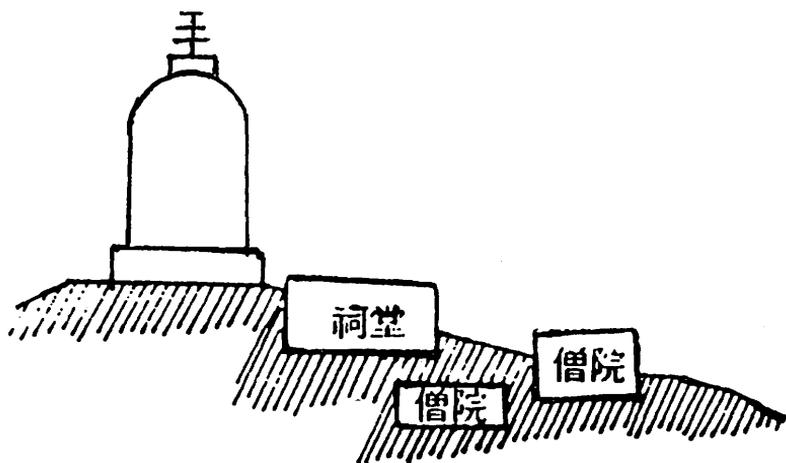
カ王が白兔を追っていると、羊飼いの子供がストゥーバを作っている。大王が行くと姿が見えなくなった。そこで大王はこの上に塔を建てると、それが完成したかと思うと小塔が頭を出した。これを覆おうとすると、又頭を出す、かくて百五十尺の高さの塔になってしまった。然し、又二段目の石基の中ほどに又小頭が首を出したとある。従ってこの律の作者は西紀二世紀のカニシカ大塔の存在を知っていたことになる。

更に、この「円起二重方牙四出」の後の文章、筆者が「~~~~」をつけた所が興味をひく。即ち「僧院より塔の方が高く」なった時代がここに示されていると思われるからである。

即ち、もともとは僧は舍利供養にかかずらなかつた。大般涅槃経の釈尊の遺言があるからである。従って僧院に塔はなかつた。然しながら、一般大衆の塔への崇敬が隆盛になって来るといつしか僧院にも仏塔が造立されるに至った。然し下図の如く僧院の一段下に、然も町から参詣する一般の信者が僧院生活を妨げないよう、僧院の手に作られるようになった。この代表的な例がタキシラのカラワン(モ)やギリである。

従地涌出(高橋)





ジャマルガリ



タフト・イーバーヒー僧院複現図（原図カラチ博）

やがてこの位置が逆転するに至る。前頁のジャマルガリのように塔が山頂に建てられるに至るし、ガンダーラ最大の寺、タフト・イ・パーイ⁽⁹⁾のように旧塔院は僧院と同じ高さにあった(現在の奉獻塔の広場)が、やがてこれより一段高い所に大塔が建てられ、まわりは大きなチャイトヤでかこまれるようになった。即ち、二十五頁最後の傍線の塔の水が僧院に流れるということである。

ジャマルガリからは法蔵部⁽¹⁰⁾、タフト・イ・パーイからは飲光部の碑銘が出土しているから、小乗仏教はこの時代に「仏塔教団」として隆盛を誇っていたことになる。従って、現在もガンダーラの山々を覆うように作られている仏教遺跡は小乗に属するものであったことが推量されるから、如何に当時の小乗仏教が、大きな経済力をもった国王商人達をスポンサーとしていたかが想像できる。これは静谷目録一七四五のカラワン出土銅板銘文(長者) 静谷目録一七六二のマトウラ出土獅子柱頭銘文(王族) 等多数の銘文がこれを物語っている。

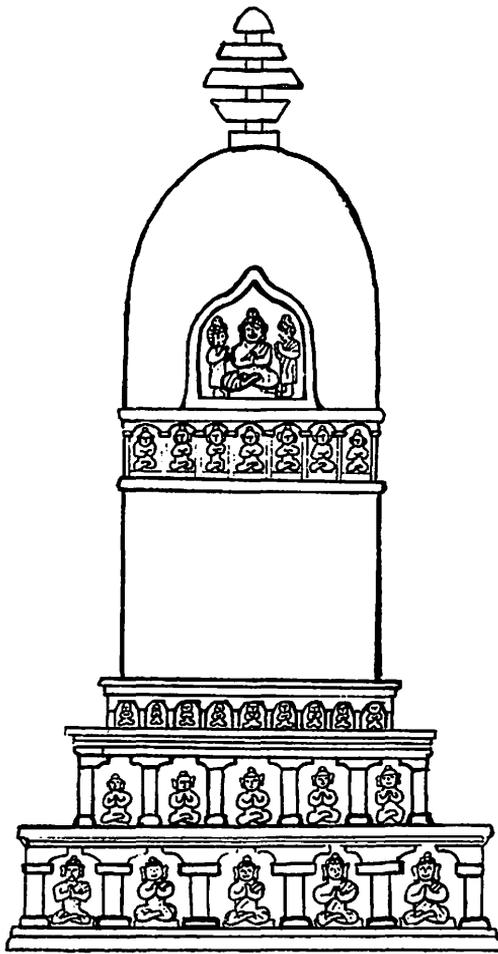
それなるが故に、これに反撥した庶民は、泥団子一つでも、即ち「まごころ」、「信」を捧げるといふ信仰を、その対極として発展させて行つたであろうことは容易に推測出来る。この一つが大乗仏教として別派を作つて行つたが、小乗の中にもこうした庶民信仰への共感が起つて行つた。これは新興の大乗が小乗の中に影響を与えたかどうかは浅学の私には分らない。然し、こうした話が各部派の伝持していた律の中にあるということは、小乗自体が自己反省して来た、否自己反省をせざるを得ぬ当時の時代相を示すものだと考える。

律は何か事が起ると、その都度長老達が集まって規律が「釈尊の名のもとに」つけ加えられ、その因縁・理論付けをしたものなるが故にカニシカ大塔の出来た頃に、法華経等と共に、小乗自体の中に共通な庶民信仰が流布していたことを示す興味ある資料だと私は思っている。強いて言えば、小乗仏教の中に、最早、大乗的な考え方が現われてい

たと言えよう。⁽¹²⁾この時代がカニシカからフヴィジカの時代、即ち二、三世紀から四世紀であろう。



サンチー等のインドの仏塔とガンダーラのそれとは、私には本質的に違ふように思える。たしかにタキシラ東方二
十キロ程にあるマンキャラの大塔と、タキシラ最大の塔ダルマラージカの大塔は、サンチー型の塔である。インド型
の塔はここ止りである。（然してマンキャラの大塔は同じ土饅頭のインド型ではあるが、本質的に異なるものをもって
いると私は考ふる。このことは後述する）



A 現存の塔

然して、前述の如く、法華経や摩訶僧祇律・五分律の如き「高さ五百由旬縦横二百五十由旬」、「高一由延面広半由延」、「從広半由旬、高一由旬」の2対1の細長いものを列記すると
A、主塔が現存する

もの。

1、タキシラ パラー塔

2、ガンダーラ現存せざるも玄奘時代に存在したシャジキデリー大塔

3、スワット ターナの塔・シャンカルダル塔・^{アドン}過部部多の石塔(現存)

B、主塔はなくなっているが現存の奉獻塔のある所

1、タキシラ ジャウリアン (marshall Taxila III plate 107-a)

モラモラドゥ (同 plate 95—b)

ピッバラ (同 plate 98 b)

2、ガンダーラ

タフト・イ・バーイの奉獻塔

(Percy Brown Conjectural Restoration of the main stupa)

3、スワット

ブトカラ

ブトカラ III

4、アフガニスタン

ジェララバード郊外ハッダ

カピシ・ベグラム ハイターバ

C、チャイトヤとしては

1、タキシラ

從地涌出(高橋)



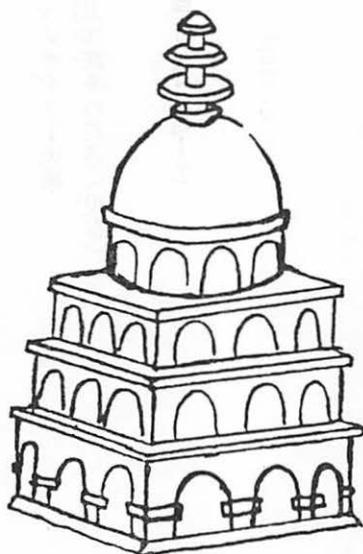
B-3
・シルカップ



B-2
・カラワン



B-1
・シルカップ
・クナーラ

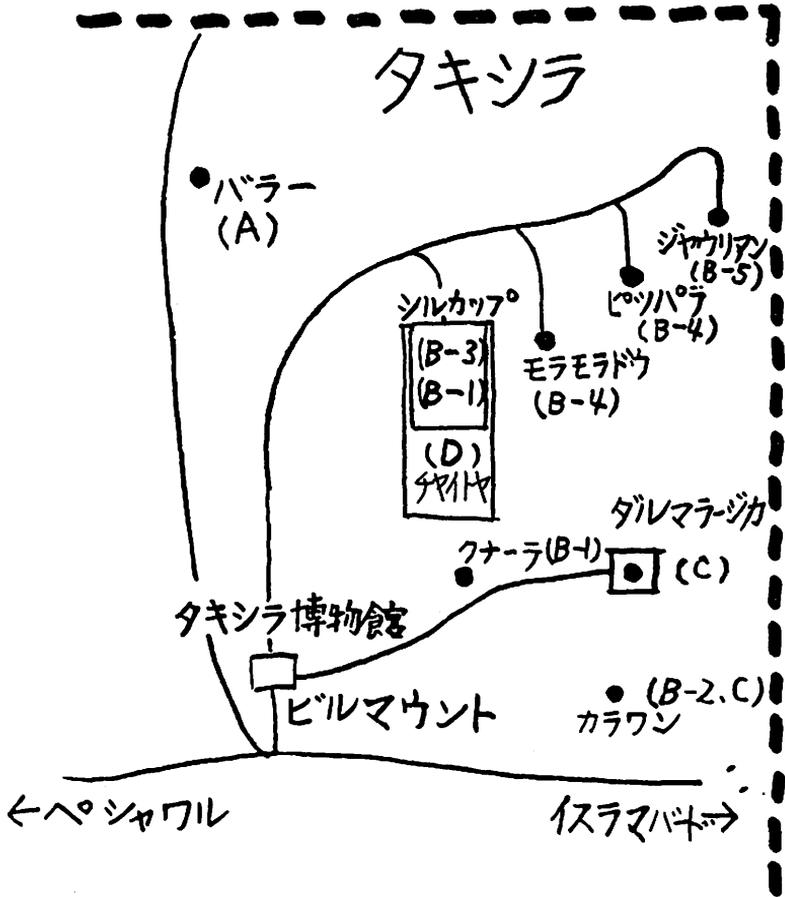


B-5
・ジャウリアン
・ハツダ



B-4
・タフトバイ ・ピツバラ
・ジャマールガリー
・タフト、イ、パーイ
・ローリャンタンガイ
・プトカラⅢ
・ハイターバ
・モラモラドウ

從地涌出(高橋)



ストゥーパ及チャイトヤ
分布図その2

更にこれらの分布図を示すと前頁のその一とその二の如くなる、(地図上の名前の次の番号は参考図1、2の塔の類型を示している)

かく、私が長年にわたって調べて来た遺跡から2対1の背の高い塔はタキシラ以西、ガンダーラ、スワット・アフガニスタン、即ち広儀のガンダーラ、所謂クシヤンの勢力圏の中であることがわかる。

そこはクシヤンのコインでも分るように西方の思想が流入していた所である。例えばカニシカのコインの約三分の二は西アジア・ベルシャの神々であることは、ここに如何に多くの異邦人が移り住んでいたかがわかる。



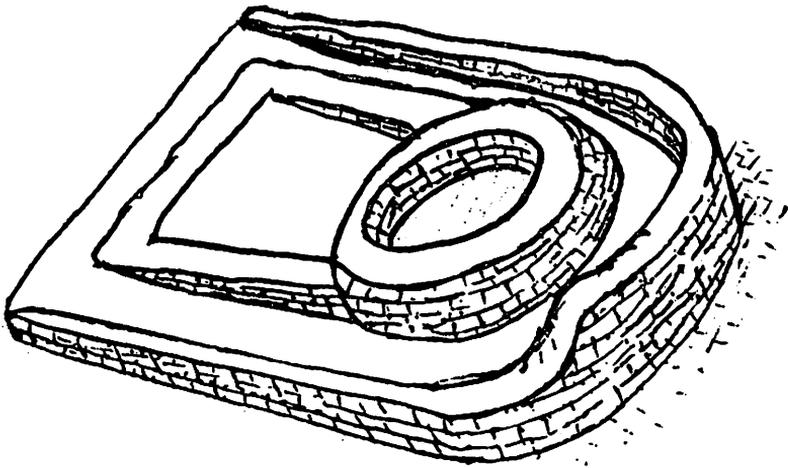
更に興味あることはタキシラのシルカップから、細長い塔とチャイトヤ堂が発掘されたことである。シルカップはインドグreek・サカ・パルタイ、そしてクシヤンのクジュラカドフィーセス、ヴィーマカドフィーセスまで住んだ都である。カニシカに至ってシルスクに移って行った。然して不思議なことにクシヤン時代にはギリシヤ人が仏教寺院に奉獻した碑銘は残されているが、ギリシヤ時代の建造物や遺物には全然仏像はもとより、仏教に関する図柄の彫刻は見い出されない。ギリシヤ人は仏教芸術に大きな影響を与えてはいるが、ギリシヤ人自体はその支配時代にはどうやら仏教に関心を持たず、自らの神々に帰依していたことが、その残されたものからわかる。

然し、このシルカップの町で、ギリシヤの次のサカ時代の層は全然別の様相を呈する。特に前掲現存奉獻塔のB3の如くアーカンサスに全面おおわれた倒れた塔が出土していたり、二重の塔(前掲奉獻塔B1)も出土している。前者は西紀前三十年頃と推定される地震によって倒れたままである。サカは西紀前九十年から二十五年までだから、前九十年から前三十年までに作られたことになる。

このアーカンサスの彫刻と同じような図柄の然もこの復元
図⁽¹⁶⁾（前掲奉獻塔B-2）そのままのオリジナルの塔が⁽¹⁷⁾（前掲奉
獻塔のB2）シルカップから二キロ南東のカラワンから出土し
その塔の底から「サカの一三四年」、即ち西紀七七年に比定さ
れる年の銘文が出土しているから、シルカップのサカの塔の影
響と言えよう。

然も、更に興味あることは、シルカップのアーカンサスの倒
れた塔のすぐ横には、アプシダル・テンプルといわれるチャイ
トヤ堂⁽¹⁸⁾が作られていることである。勿論サカ時代である。所謂
前方後円の建物である。その後方の円型の建物の部分にストウ
ーバがあつて、建物の壁にかこまれた中にストウーバが安置さ
れている所が注目されねばならない。

サカはこのガンダラを支配するだけではなく、インダス河
口やナルマダー河口のブローチ等を支配し、西方貿易によって
永く栄えた種族なるが故に、前二世紀頃から、盛んに造立され
ていた西南インドの石窟寺院は熟知のことであつた。その為そ
の窟院の中に塔を入れて祀る方式を採用したのであるまい



アプシダル・テンプル

かと私は推測する。

そのサカと窟院との深い関係を示すものに窟院への奉獻碑銘が残っている。

例えばナシクに⁽²¹⁾「Saka no Damacika no 書記で Dasapura の住民たる Visnudata の子 Vudhika が窟と水槽を」
静谷目録七四七には水槽を、同四四二では、ジュンナルに、「サカ人の優婆塞 Aduthuma が Vadalka Karanja
植林地二〇〇ニバルタナと Kataputaka の榕樹 (Vadamula) 植林地九ニバルタナ (から生ずる収入) が Kanacika
のギルト (Sani) に投資され……」と。同じ趣旨のものが、同四四三以後に続く。

かくサカと石窟寺院と密接な関係をもっていた。従って、こうした資料からすると、サカ族がタキシラに窟院形式のチャイトヤを持ち込んだと推測しても、けっして不自然とは思われない。窟院では洞窟の性格から、窟の中にストゥーパを彫り出し、その塔のまわりを繞道したり礼拝した。この窟の代りに建物を作って、その中にストゥーパを奉安した。これがチャイトヤ堂である。

このようにサカの時代に塔を建物の中に入れたり、塔を長くした。その原因はどこにあるかという興味ある問題に突き当る。

マンキアラの大塔はインドの伝統をひく、土饅頭形式の塔であることは前述した。然し、その大きさの規模が違う。山をも思わせる程巨大であると感ずるのは私だけではあるまい。

こうしてインドの形式をひく土饅頭型でも、とてつもなく大きいのは、塔がどんどん長くなったり、その塔のまわりに仏像や彫刻がはめ込まれて荘嚴化すること、然も又、その塔を野天に建てて、風雨にさらすに忍びなく、チャイトヤ堂の中に入れるという心情とけっして別なものではないと私は考える。単なるお墓であつたら、野天にあつて

もいだらう。然し、このように、仏塔を荘嚴化し、天にもとどく、後世のビルマやタイの仏塔のようになるのは、単なるお墓としてではなく、仏身観が深化して、超越者、絶対者という考え方が起りつつあったのではなからうか。否むしろ、インド側に於てはそこまで深化発展しなくとも、サカをはじめ、西から来た民族、特にベルシャ系の民族の考え方では王を超越者として考える傾向があった。このような考え方をもってインドに入って来たからこそ、仏教に帰依しても仏を人間としてより、超越者として考えたと私は考える。



勿も、仏陀観が変り、仏身観が深化して行くのは、西方の影響とばかりは言えない。インドにはインド自体で仏身観を深化する基盤があったといえよう。

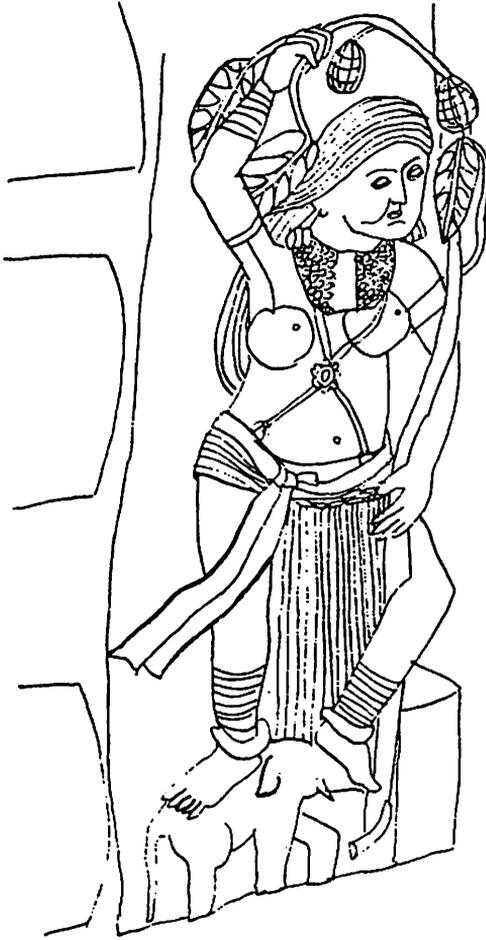
即ち、もともとは仏舍利を収めた釈尊の噴墓は追憶思慕のものであった。然して、その祀り方は古来からあった聖樹・夜叉信仰の伝統に従っていた。聖樹信仰とはモンスーンインドの大地の神、豊穡の神としての「大地の生命力」の表現で、その発現としての巨木や夫々の種族に関係ある樹をトーテム樹として信仰し、又これを人格化したのがヤクシャ・ヤクシー（夜叉）信仰となつた。



モヘンジョダロ：Aśubatta 樹間の樹神

古くはモエンジョダロ・ハラッパーのインダス文明に樹のシールが出土し、又マウリヤ朝以前の古代打刻コインに樹の模様が打ち出されていたり、豊満な女性のテラコッタが沢山出土しているのも、この豊穰なる地母神信仰のあった証左といえよう。この女性のテラコッタがやがてパールフットやマトウーラの「樹をいだけ豊満なヤクシー」に発展するのである。

もとからあつた聖樹夜叉信仰の伝統に従つて釈尊の舍利を祀つた。これはジャータカ五四七話の中で随所に示されていることである。

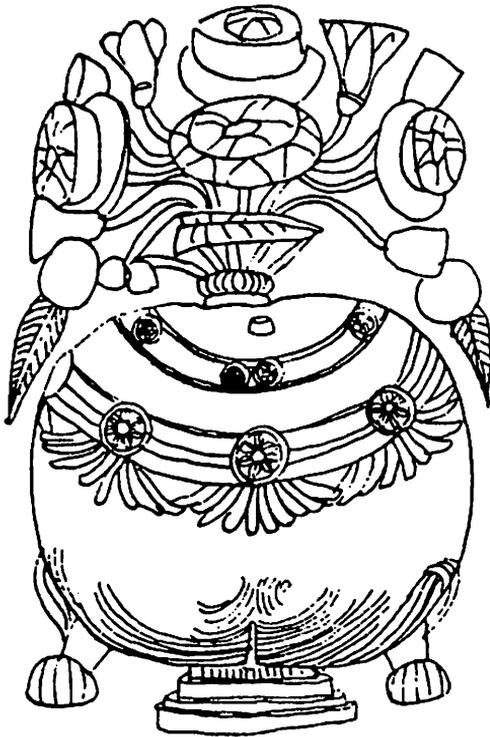


パールフット Cul Iakoka Devata

從地涌出(高橋)

例えば、ジャータカ三〇七話のパラーサ本生に「樹の根本を平らかにし、草を抜き、まわりに垣を結び、砂をまいて掃き清め、五指量の香を供養し、花環香薫香を供養し、灯火を点じて樹のまわりを右繞²⁰⁾」四七九話迦陵本生には「(聖樹に)諸仏の勝座大地の躋たる大菩提座を認め、王の「サリーサ」ばかりの広さを限って兎の髮程の草も生えて居らず、銀の根のように真白く、輝く砂が一面に撒かれてあった。然もその周囲一面には雑草や蔓草や森に生える大樹などが生い茂っていて、恰も菩提座の方を向いていた²¹⁾」とあり、これと同じような表現は五三七話マハスタソーマジャータカにもある。

然もストゥーパーの造り方も聖樹と似ている。即ち、四七九話の「長老阿難は大菩提樹を植える場所に、大きな黄金の甕を置いた²²⁾」とあり、これと同じことがストゥーパーを作る時にも行われた。マハーパンサ(二九一五・七)(三〇一二乃至一三)に、「ストゥーパーを建てる中央に水を満した金銀の壺が置かれた」と書かれているように、菩提樹とストゥーパーの構造がまことに似て居り、否むしろ聖樹信仰の形式の上にストゥーパー信仰が出来



ナガルジュナコンダ Purma-ghata (デリー博蔵)

ていることがわかれる。

聖樹は前述の如く、大地の生命力の表現、地母神のシンボルなるが故に、この伝統の上にストゥーバが出来又、その信仰が形成されたとなると、ストゥーバは最初の「舍利安置所」、追憶思慕のものから、容易に変わって行くのはその性格上必然である。人間釈尊の舍利安置所から、どんどんその仏身観は変化して、我々をして、かくあらしめる超越者、ひいて救済者に変容して行く筈である。

かかるが故に、最初は単なる土饅頭であったストゥーバが、まず基壇がもうけられ、更にこれも何重にも重ねられ、塔身自体も最初は泥の伏鉢体であったものが、石で積みあげ、更にその上をシッキイで仕上げる等、美しくなっていく。それだけではない。パイシャリーヤプトカラの発掘からわかるように何重にも同心円的に増巾され拡大されて行った。タキシラのクナーラの塔の、こわれた大塔の中から美しい小塔が顔を出している如き、沢山の塔中塔は、この莊嚴化のプロセスを示すものである。こうなると、仏身観もどんどん深化し、逆に又仏身観が深化すれば塔も莊麗化されよう。かく、塔と思想が相互作用によって、お互いを深化発展せしめて行く。この最たるものが、アフガニスタン、チャリカル郊外のトープダラー大塔だと思っている。何重もの基壇そして塔身自体にまで仏像や彫刻におおわれて来ると、これらは舍利塔だけではなく、一大マンダラの表現と思われて来る。こうなると、宇宙の生命、我々をしてかくあらしめる縁起の総体、八千頌般若経のいう「般若波羅蜜多是仏母である」という、仏を仏たらしめるその根本、法華経の「法ダム」というものになって来る。

このように仏塔の莊麗化と規を一にするのが、チャイトヤの成立である。単なる基ならばストゥーバは野天に置いてもいい。雨露にさらすに忍びないから、屋内に安置した。だからこそチャイトヤも究極の所、仏舍利を安置する立

場に止らず、法華經の「舍利を安すべからず、所以はいかん、この中には己に如來の全身いませばなり」の「法」を収めるもの、否法そのものという立場に昇化する。従つて般若經の「般若波羅蜜多（智慧の完成）を書物にして収め、花香を供養……」⁽²⁵⁾ということになる。この法こそ何回か述べて来た如く、我々をしてかくあらしめる大宇宙の理法、それを人格化したものが久遠の本仏であり、阿彌陀の一仏乘である。

故に、仏塔を高く高く、又莊麗化することと、塔をチャイトヤに収めることとは別なことではなく、共に「舍利」から「法」へのプロセスであると私は考える。

然しここで特筆すべきは、あくまでインドサイドの塔は、サンチーのような莊麗化した塔でも伝統に従つて土饅頭形式を脱していない。勿も、インド側でも背の高い塔はなくはない。ブダガヤの大塔や、サルナートのダメーク塔のように。然し、これらは後期のものであるからここで扱うことと関係はないが、前述のビルマやタイで後世あのように天にもとどくような、塔を建てて来るのと規を一にして、仏を人間としてではなく、超越者救者と考える考え方が出て来た故であらう。



前述の如く、後世はとにかく、インド側の塔は土饅頭形式で、タキシラ以西は背の高い塔が出来、又チャイトヤ堂が出来て来たことは續々説明して来た。

この背の高くなる塔について、一応仏像が作られるようになり、その仏像や彫刻（仏伝・ジャータカ）を安置すべく、そのスペースを確保する為、塔はどんどん長くなって行ったとも考えられる。例えば、無仏像時代のアジャンタ石窟第九・十窟（前一世紀）の塔に対して、十九窟（五・六世紀）の仏像をもった塔が非常に高くなっているか



らである。

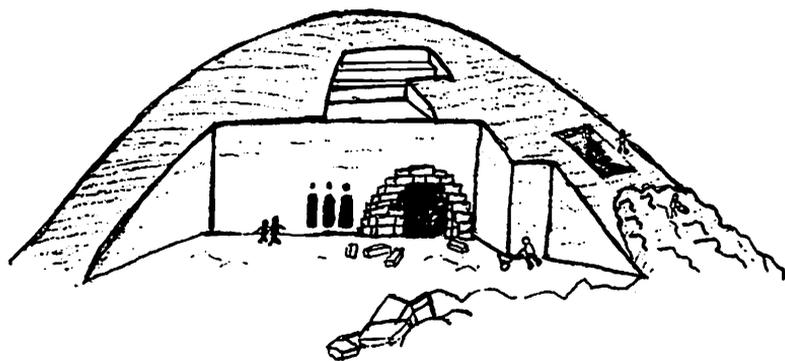
然し私がここで問題にしたいのは、「なぜ背を高くせざるを得なかったか、又塔をその中に収めるチャイトヤ堂が出来て来なければならなかったのか」という底にある考え方である。

この背の高い塔やチャイトヤの分布図でもわかるように、これが西北インド、ギリシャやサカパルタイ、そしてクシャーンの支配した土地でなぜ起らねばならなかったか、このことが注目されねばならない。

私はこのヒントをマンキャラの大塔で考える。即ち、インドの土饅頭式の塔は、このタキシラ東方二十キロの塔や、タキシラのダルマラージカの大塔が西限である。然も、このマンキャラの大塔がとてつもなく大きいことが注目されねばならない。小山を思わせる巨大な塔、写真左隅で草をとる人と比べてもいたい。同じ土饅頭式ながら基壇を入れると直径五十メートルにも達しようとするこの塔、これこそ塔を高くし、又塔をチャイトヤの内に入れる。「仏を超越者として考える」思考の表現ではなからうか。

特に前述の如く、シルカップに於ける最初の二重の屋根の細長い塔や、チャイトヤ堂が、異邦人たるサカ族の支配時代に現れたという事実注目せねばならないと考える。これこそ、人間釈迦のインド的考え方に対して、超越者としての釈迦を考えたと証拠であると思う。彼等はこうした思考をもった民族であった。これがインドに入って来たのである。

もともとサカは、中央アジアのカスピ海から、黒海あたりまでにひろがっていた草原の遊牧民スキタイである。彼等はベルシヤ系の民族であり、ベルシヤの文化を十分身につけていた。従って彼等のもつ「神観」はベルシヤのそれであった。即ち、彼等にとって王は神の代理、神の意をうけて政治を行うもの、否、この世の神とまで考えられていた。だからこそ、彼等は王の墓を小山のように土を盛り上げて巨大な墓を作った。この墓が何十何百と中央アジアにひろがっている。即ち全体(28)の王だけではなく、地方の王のもこのような墓を作っている。王を超越者と考える考え方ももっていた証明でもある。これは又クシヤンについても考えられる。カニシカ王が神として考えられたことはスルフコタルの神殿から明白であり、又コインに刻されたカニシカ王の肩から火焰がたちのぼっているのを見ればわかる。共にベルシヤ的考え方に立っている。これらの種族がギリシヤ民族に



1964年発掘中のスキタイ墳墓 於 BolchaiaBliynitsa ソ連黒海東岸

続いて西北インドに入ってきた。そして特にこのサカ民族の住んでいた「地層」から仏教的な色彩をもつ遺物が発見されている（仏像はクシヤンに入ってからだが）。前述の如くそれ以前のギリシャ人の層からは発見されていないから、サカは仏教に関心をもち、仏教に帰依した最初の異邦人といえる。この異邦人の残したものが二重の仏塔であり、仏塔を家の中に収めたチャイトヤ堂であった。だからこそ、私は釈尊を単なる師、仏教の開祖としてだけではなく、超越者として考える聖樹信仰のインド在来の地母神的思考を刺戟して、「仏身観」の深化に拍車をかけて行ったのだと私は考える。先述のマンキアラのとてつもなく大きい仏塔はインド式仏塔ながらも、こうした外来の刺戟によってクシヤンの時代に増巾されたものであろう。



かく私は従地涌出の背の高い塔やチャイトヤがタキシラからアフガニスタンに分布していることを見て来た。

仏教はインドで起り発達して行った。もしこれがインドの中だけで発展して行ったなら、教儀の自己発展、論理の自己転回で、それは或る称度の深い論理には達し得ても、果して般若経阿弥陀経、そして法華経等の「法」^{ダツタ}「一乗思想」そして「超越者としての仏陀」、「仏の哲願」等の思想が果して起ったろうか。そして又外来の刺戟なしに大乘の思想が形成されたであらうか。

ガンダーラや西北インドを中心とした地域、異邦人の共住したこの地域で大乘仏教が起ったという事実は注目せねばならない。そこでは彼等のもって入って来た世界観、神観等が、仏身論をはじめとして仏教に影響とまでは行かないとも大きな刺戟となつて、仏教自体の論理の自己展開を促したものだと思はれる。なぜなら、前述の如く大乘仏教はインドの内部ではなく西北インドで起ったから。

從地涌出（高橋）

特に注目さるべきは、シルクロードによる東西交易を一手に握ったクシヤン王国。その財力をもって、塔や僧院を奉獻し、ガンヂーラの山野は莊麗な仏寺でうまった。然しその一方で、「信」とう心の重視の傾向を生んだことが、前述の「一団泥」の経文の文字が雄弁に物語っている。

然も、このガンヂーラの地で、インドとペルシヤの文化が融合し、仏教を一層深化せしめて行った。「從地涌出の塔」こそその一つの表現であらう。

〔註〕

- (1) 岩波文庫法華經中一六八頁
- (2) 大正一〇二—四九七中—八の上
- (3) 大正一〇二—九五八上中
- (4) 大正一〇二—一七二上—一七三上
- (5) 大正一〇二—一五三上中
- (6) 岩波文庫法華經上一一四頁
- (7) 大唐西域記卷二—四—三迦賦色迦大塔
- (8) Marshall, Taxila III plate 72
- (9) Fidalan Sehrai A Guide to Takht-i-bahi (Peshawal museum)
- (10) 静谷正雄小乘仏教史の研究（百華苑一九一—一九二頁）
- (11) 静谷目錄一七八五でコーノーについて論及
- (12) 榎神五十三号（S・五十六年三月）身延学園
- (13) Rosenfield, Dynastic Art of kushan参照
- (14) Marshall Taxila III plate 27のa
- (15) Marshall同前 plate 26 Gc（奉獻塔B—1）

- (16) 同書 plate 73a
 - (17) 同書 plate 79a
 - (18) 同書 plate 26a
 - (19) 静谷目錄 七四六
 - (20) 南伝―三一巻三四二頁
 - (21) 南伝―三四巻一六三頁
 - (22) 南伝三四―一五六―七頁
 - (23) Marshall 同書 plate 87-a
 - (24) 岩波文庫法華經中一五四頁
 - (25) 大乘仏典八千頌般若經―第三章知慧の完成とストーリー 一〇二頁
 - (26) 大乘仏典八千頌般若經―第三十二章委託三七三―四頁
- Bolchaita Biznitsa のスキタイ墳墓―一八六四年の発掘途中
- L'ART SCYTHE LESANTIQUITÉS SCYTHES MILIEU DU VII^e-III^e SIÈCLE
- AVANT NOTRE ÈRE 1987 milano

猶この論文作製に当ってラホール博物館長ダル博士、東京オリエント博物館田辺勝美氏に示唆に富む資料・アドバイスをたまわったことを附記する。

従地涌出 (高橋)